

日本語の形と意味¹

沖 裕 子²

大学において最も重要なのは自由である。

大学人は与えられた自由に振り回されず、誠実に使いこなす義務がある。

1. はじめに

この度、信州大学を定年退職するにあたりまして最終講義を行います。

この場には、次の方々がお集まりくださっています。私が最初に専任講師として着任した京都市にある花園大学文学部国文学科国語学専攻の卒業生の皆様、そして、その後今日まで教鞭をとった信州大学人文学部の在学生、卒業生、大学院修了生、同僚の皆様、さらに、長野・言語文化研究会会員の皆様、また、お出かけ下さった一般の皆様です。

今日は、いつもどおりの90分を頂戴し、一学徒として取り組んできた研究の道を、その時代の空気や研究動機も交えてふりかえりながら、「日本語の形と意味」というテーマについて私なりの分析考察を述べてみたいと存じます。おおよそ年代順に、具体的には、次の順番で取り上げて参ります。研究的に新規な内容は第9節、第10節であり、そのほかは末尾の私の主要業績一覧のいずれかで発表した内容です。煩瑣になることを恐れて自己引用は割愛し、重要な参考文献のみ引用いたします。

2. 私の研究的関心のありか
3. 気づかれにくい方言の研究
4. 接続詞の研究
5. 日本語音調の研究
6. 談話論の研究
7. 日韓中対照談話論の研究
8. 談話構築態度の研究
9. 表現と理解からみた談話の形と意味
10. 日本語の形と意味

¹ 本稿は、2020年2月8日（土）、信州大学人文学部棟4番教室で行った最終講義のすべてである。本稿の読み上げで行ったため、文体はです・ます体のままにしてある。当日は、109名の参加者があった。

² 最終講義の時点では、信州大学学術研究院人文科学系教授。紀要掲載時は、信州大学名誉教授・特任教授。

2. 私の研究的関心のありか

2.1 社会言語学への関心

私が日本語に関心を持ったのは、ごく幼いときです。

このことは、2006年に「私」の言語学」（言語学出版フォーラム <http://www.gengosf.com/>）と題したエッセーに書きましたので、引用のうえ朗読いたします。

「私」の言語学

小学校の木造校舎二階にあった古い立派な図書室には、ぎっしりと本が詰まっていた。昭和三十年代後半の、長野県松本、旧市内である。

午後の最後の授業が終わり、少し傾いた陽射を感じながら、重い木の引戸を開けて中に入ると、一斉に本の背がこちらを見るような気がしたものだ。書架の前に佇んだままもどかしく頁を開くと、声というもののないことばがひしめいて、次から次へと世界が私の前を通りすぎてゆくのだった。

幼い頃から、ことばというものが何とは無しに不思議でならなかった。日々の暮らしのなかで父が語ることばはたいへん分りやすく、聞いていると、どんな物事もしっかりと輪郭をなして眼前に見えるようだった。母が語ることばは声に張りがあって、空や雲や花や風を瞬時にとらえ、美しく短く表現した。妹とはたった二歳しか違わなかったけれど、私のことばとはほんの少し違っていて、街に育つ人の匂いがした。

私は、たくさんのことばに囲まれて幸せであったが、はたして「私」のことばは一体何だろう、どういうものだろうと、いつも考えていた。結局、分らないことの気持悪さに耐えられなくて、「私」のことばを追いつけて今に至ったことになる。

大学生になって触れたその時代の言語学は、「私」のことばが何であるかには関心を持たなかった。日本語を研究することと、「私」のことばを研究することは、異なっている。日本語には地域方言や社会方言があり、外国人が第二言語として習得した日本語も含まれている。そこでは私自身の母方言を研究してみたものの、しかし、「私」のことばは見えてこなかった。なぜなら、そのとき「私」は、松本方言を使うと同時に、東京方言にも接し、話しも書きもし、様々な文体を操って暮らしていたからである。現代では、たいいていの人があるように暮らしているであろう。

「私」のことばは、人生と同様一回限りのものである。ラングと呼ばれるあなたと私に共通する言語体系のあり方のみを探究しても、多様な資源を駆使して創造的に産み出していく「私」のことばの説明にはつながらない。それには、談話論という新しい領域の開拓が必要であった。私はいま得た、この「私」の畑を、もう少し耕してみたいと願っている。

この文章は、東京都立大学に提出した学位請求論文『日本語談話論』を出版した直後の2006年に記したものです。私の51歳の年にあたりますが、今でもここに書いたことと変わらない思いを持ち続けております。

人が話す「声」というものが不思議であり、ひとりひとりのことばが違っているというこ

とへの気づき。また、書きことばと話しことば、方言と共通語、日常語と詩語など、多様なコードが個人語のなかにあるという複言語への関心。そして、自分のことばとは何か、という疑問。これら3点が小文のなかでは語られていると思います。

私が学生時代を過ごした1970年代には、談話という学術用語もまだ無く、言語の最大単位は文であるという考え方が主流でした。また、共通語について研究する、方言について研究する、ということはあっても、一人の人が複数の言語体系を有している状態そのもの、つまり「複言語」を研究するという研究態度はありませんでした。さらに、日常語と詩語を連続的にとらえるという研究視点は皆無で、今に至ってもほとんどみられません。ちなみに、ことばの使用のされかたに関心をもつのは社会言語学という領域ですが、1970年代は、まだ言語社会学と言っていた時代でした。

2.2 体系記述への関心

ことばの使用のされ方に関心をもつ一方で、私は当時から言語の記述的研究にも大きな関心を払っておりました。「私」という個人の言語への探求心は、ごく自然に個人語の体系に対する関心へと広がっていきます。当時は、個人語に注意が払われることは少なく、方言や共通語のようなひとつのコードの体系記述しか行われていませんでした。言語共同体で使用されることばには、実際には様々な階層差、位相差がありますが、適切な個人をとりあげれば、その個人語は言語共同体の言語体系を代表するという前提で体系記述が行われていた時代です。

欧米では、言語の意味は捉えどころがないという理由で長らく研究対象から除外されてきました³。意味が、研究対象として認められたのは1960年代です。意味論研究が始まり、英語学者の国広哲弥氏が日本語の語の意味分析を始めたのが1970年代です。意味の研究は、このときまだ「語」という言語単位が中心でした。国広哲弥氏のもとで語の意味分析を学んだ中本正智先生が、東京都立大学大学院の修士課程1年であった私たちにそれをお教えになり、先生のご指導のもとに編まれた研究室雑誌『日本語研究』第1号に類義語の意味分析が特集されました。私は「しる・わかる」の意味分析を投稿して掲載されました。23歳の時でした。

他方、指導教官の大島一郎先生の方言学の演習では、八丈島方言の待遇表現の研究とともに、方言アスペクトの研究を行い、語の文法的な意味の研究を経験しました。東京都立大学大学院に在籍した実質的な5年間に、語の意味分析を、語彙の意味と文法的意味の両面において経験したことは、その後の私の研究的基盤を作るうえで大きな影響力をもったと思います。期間延長して在籍した大学院博士課程においては、さらに私なりに語の文体的意味に興味をもち、自力でいくつか論文を書きました。ふりかえてみると、院生時代に、まがりなりにも語の意味の基本をなす語彙の意味、文法的意味、文体的意味の3大側面のすべての分析にとりくんだことは、言語を体系的に分析考察しようとする関心のあらわれであったと今にして気づきます。

³ 水谷静夫先生の岩波講座でのご講義を編集した水谷（2011：96）を引用しておきます。「不思議なことでありますが西洋の言語学や言語哲学は長らく、意味の問題に立ち入らずにきました。意味を論ずるのに冷淡でさえありました。」種々の言語学史をひもとくまでもなく、その時代の空気に私は接していました。

2.3 形と意味への関心

こうした語の意味の研究を通じて実感したのは、個人語が言語共同体のラング（成員に共通する規則体系）を代表するものではない、ということです。国広哲弥氏が『意味論の方法』で明確に指摘したように、直接の観察対象となる語の用法は個人によって幅があり、用法の幅の最大値と最小値を勘案し、その都度の中庸をもって意義素（意味の中核）を析出していくしかない、ということが実感されました。つまり、語の意味とはそれほど確たるものではなく、個人によってゆらぐことがあり、当然ながら、確固とした規範性をもっているはずの共通語の単語の意味・用法も、出身方言の干渉を受けて使用の幅がみられることがあるという面が実感されたのです。換言すれば、個人語とは1言語を代表するようなものではなく、逆に、1言語は個人語の集積であるという社会言語学的な考え方の妥当性が、逆説的ですが、体系記述そのことを通じて実感されたのでした。

こうした研究的体験は、その後、体系記述と社会言語学的研究の接点あるいは両者の止揚を真剣に模索する契機となりました。また、日本語の形と意味の関係についても、その後、深く関心を寄せ続けることになりました。

3. 気づかれにくい方言の研究：語における形と意味のずれ

当時信州大学教授であられた馬瀬良雄先生のお導きで、東京女子大学から東京都立大学大学院へと進学した私は、先生が中心となって進めていた、実証的な東京アクセント調査のお手伝いを依頼されました。1978年のことと記憶しております。中学生のアクセントを一斉に録音するために、学習院女子中等科のLL教室で調査指示を出していたときの出来事でした。

調査内容を説明したあと、「それでは、ヘッドホンをかぶってください」と言ったところ、教室にどっと笑い声が起きました。粛々と進む言語調査の場で、なぜ笑い声があがるのか、しばし分かりませんでした。

気づいたのは「ヘッドホンをかぶる」という表現です。後日確認すると、東京地域では「ヘッドホン」は「つける」または「する」もので「かぶる」とは言わない、という事実を知りました。当時のヘッドホンは、いまの人間ドックの聴覚検査で用いるような器具でした。大きな両の耳覆いがあり、それらを固定するアーチ型の金属が渡され、頭頂で帽子のように添わせることから「帽子をかぶる」と同じように「ヘッドホンをかぶる」と言っていました。少なくとも、18歳まで生育した松本市の学校ではそのように言っていたのです。

共通語とは異なる形をした語を「俚言（りげん）」と言います。たとえば、「ズク」や「ミヤマシイ」は俚言です。共通語化によって俚言は消滅していくと当時は考えられていました。しかしながら、この一瞬の経験を通して理解したのは、現代特有の言語状況をつかまなければならない、ということでした。

「かぶる」という語の特徴を整理すると、①形は共通語と同じか似ているが、②意味・用法が共通語とはずれており、③話し手はそれを方言だとは意識していない、というものです。私は、後にこれを「気づかれにくい方言」と呼ぶにいたりしました。そして、その後京都市で得た経験から、「気づかれにくい方言」には語彙的意味のずれだけではなく、文法的意

味のずれや、談話的意味のずれも存在する、すなわち言語全般にみられる現象であることも次第に発見していったのです。

私は東西方言の接触地帯である長野県松本市で18歳まで育ち、東日本方言の中心地である東京で9年間勉強して過ごしました。その後、公募により、京都市中京区にある臨済禅の宗門大学、花園大学文学部国文学科で専任講師となり、生涯で初めて研究室を与えられ、国語学を担当することになりました。

関西に移り、そこで出会った学生諸兄姉の言語行動を観察しているといろいろなことに気づきます。1988年ごろのことです。ある日、花園大学のロビーで同僚を待っていると、一人の学生が遠くの学生に向かって大きな声で、「先、行きかけて」と言うのを耳にしました。なんとなく落ち着かない気分になり、同僚を待つ間に考えてみたのです。長いこと考え続けてようやく謎が解けました。私のことばでは「行きかけて」という依頼形では使えない、というのが答えでした。

依頼・命令・意志・勧誘形というように相手に働きかける言い方ができるものは「意志動詞」、そうした活用形がないのは「無意志動詞」と呼ばれます。「流れる」という動詞は、「流れて、流れろ、(さあこれから) 流れる!、(一緒に) 流れよう」などと言えませんので無意志動詞です。特殊な文脈があると無意志動詞でも依頼・命令形が言えますが、その場合の文の意味は命令ではなく、そうあってほしいという希求になります。他方、「食べる」は、「食べて、食べろ、(さあこれから) 食べる!、(一緒に) 食べよう」などが言えますので、意志動詞です。つまりは、東日本方言の複合動詞「行きかける」は無意志動詞、西日本方言の複合動詞「行きかける」は意志動詞である、ということが分かったのです。

京都市の「行きかける」は、形は共通語にもあり、その意味・用法がずれていて、話し手は方言だと思っておりません。先の3要件に合いますから「気づかれにくい方言」です。しかも、語彙の意味ではなく、文法的意味・用法がずれている現象でした。西日本方言にしかない言い方であることは、一般の人どころか方言の研究者たちにもまったく気づかれてはいませんでした。約25年が経ち、「気づかれにくい方言」を学術用語として立項する専門事典が複数現れたのは、この捉え方が支持を得たことの証ではないかと思います(『日本語学研究事典』『日本語学大辞典』)。

それはともかく、この研究を通して得たのは、「形」と「意味」が「ずれる」ということの不思議さでした。語の形と意味の結びつきには必然性がないことは、言語学の定説です。現実世界の「机」を指して、日本語では「つくえ」、英語では'desk'という「形」であらわします。「つくえ [tsukue]」「desk [desk]」という音形に類似性がないことをみれば、簡単に理解できます。語の恣意性と呼ばれます。語の形と意味に必然的な結びつきがないのなら、それらがずれていくことは当然あり得ることです。しかし、ひとつの「語」の形がもつ意味・用法が地域によって「ずれる」という事実が、ことばの使い手本人には本当に意識されにくいのだ、というそちらの事実が私にはたいへん興味深いことのように感じられたのでした。

4. 談話と接続詞の研究

4.1 日本語教育学からの刺激と談話研究

花園大学に4年半奉職したあと、公募があつて信州大学人文学部に移ることになりました。信州大学の人文学部と大学院人文科学研究科では日本語学演習を担当しましたが、同時に、日本語教員養成副専攻課程という日本語教員資格を出すプログラムの初代責任者を任されました。これが、研究的な幅を広げるよい契機になったと感じています。

1980年代の日本の経済力の伸長に伴い、日本語を学びたいという外国語母語話者が右肩上がりに増えていきました。欧州はEU成立以前でしたがソクラテス計画、エラスムス計画などの名のもとに大学間交換留学による単位互換制度が次々に整えられていった時代です。日本でも、増加する日本語学習者人口に対応して交換留学制度の充実をめざし、かつ質の高い日本語教員を養成するためのプログラムとして日本語教員養成課程を大学に設置していった時代でした。

日本語教育学という学問分野ができたのはまさにこの時代のことでしたから、戦後からそれまでは、現代日本語学を専門とする研究者が日本語教育の中核を担っていました。東京都立大学時代の恩師の一人奥津敬一郎先生は新しい日本語教育の草分けでもあられ、韓国、中国、台湾の客員教授として短期中期出張もされ、大学院にはこれらの大学から客員教授が招かれ、また若干名の留学生も迎えており、院生時代に、過渡期の日本語教育の研究状況を多少は知っていたつもりでした。

外国語として日本語をとらえるということは、しかしながら、なかなか難しいことでした。日本方言学は方言を1言語と認めそのすべてを研究するという態度が明らかで、言語学にもっとも近い学問でした。しかし応用研究はその視野に入っていなかったため、外国語としての日本語教授法に基礎研究を生かすということが信州大学での新しい課題となったのです。このとき気づいたのは次の2点です。第1に基礎研究と応用研究は表裏一体だということ。第2に、一留学生が抱えるきわめて個人的具体的な課題に向かい合い、その解決をはかることが最も普遍性の高い応用研究成果を生む近道だ、ということです。これには工学の影響があります。当時は言語学習への応用とならんで、言語学が工学と協力して自動翻訳にとりくんでいました。工学はもともと応用学ですが、一人の高齢者が電球の交換ができない状況を見たらそれに対応する技術を考え抜くことが大事で、きわめて個別的な1事例に完全に対応する技術を考え抜いて実現したときに、それがもっとも応用力の高い技術になること、そしてそのためには、新規性を重視する高度な基礎研究の力がないと応用研究には至らないとする考え方をしていました。この考え方は、信州大学時代の私の研究態度の基本となりました。

当時の信州大学大学院人文科学研究科修士課程には、台湾からの国費留学生が多く在籍していました。日本政府とは国交がなかったため事実上の国費給付生です。様々な日本語習得の課題がありましたが、その一つに、電話会話をどこで切ったらよいか分からない、というものがありました。まだ携帯電話が現れていない時代で、家庭には固定電話が普及しておりよく利用されていました。電話をどこで切ったらよいか分からないとは、電話会話の終了部

の合図が台湾からの留学生には分かりにくいということです。これは談話展開の方法が、日本語と台湾の中国語では異なることを意味します。こうした悩みをきっかけに、談話の研究に本腰を入れることになりました。

話は多少前後しますが、信州大学に移った最初のころは、花園大学時代の気づかれにくい方言の考え方をさらに深めようとしていました。方言学のメッカと呼ばれ東條操先生、平山輝男先生が築いた東京都立大学国語学研究室に対して、当時の方言学の西の中心は藤原与一先生が築いた広島大学でした。関西在住を機に広島大学方言研究ゼミナールの一員に加えていただいたご縁があって、ゼミナールの新テーマである挨拶表現の地域差に取り組んだのです。自分なりに工夫し、全国的に共通語化が進んだようにみえても、文化人類学の民話テキストの分析法であるモチーフという考え方と音素分析を組み合わせると気づかれにくい方言が見えてくることも発見しました。すなわち、語や文だけではなく、談話単位でも気づかれにくい方言が観察されることを示す研究をいたしました。

結局、ロシアフォルマリズムやアラン・ダンダスがおこなった民話のテキスト研究を応用した気づかれにくい方言を研究するうちに、もっとも大きな言語単位である談話の研究へと舵を切ることになったと思います。これには、学部2年生の時に縁あって信州大学の馬瀬良雄教授の研究室方言調査に加えていただき、国立国語研究所が行った方言談話調査に同行させていただいた経験も大きく影響していたかもしれません。1975年11月15日のことでした。そのとき苦勞して行った長野県上伊那郡中川村大字葛島の方言談話の文字化は、馬瀬先生の監修を経、令夫人の手で浄書され、『方言談話資料』全10巻の最初の巻に収められています。当時パソコンはまだなく、手書きでした。

こうした方言学の研究と、新しく与えられた日本語教育学の課題とが相まって、信州大学時代の始まりとほぼ機を一にして、私の談話研究は本格的にスタートを切りました。

方言談話における挨拶表現の談話展開の研究を深めることは、電話会話の談話展開の分析指導に直結していきました。また、日本語教育学に意欲を示す日本人の学部学生への演習課題としては、接続詞の意味分析をテーマに据えました。接続詞は文と文を結ぶことが多く、文文法を越えて談話に視野を広げる必要があり、当時まだ研究が遅れていた分野でした。数年間、演習テーマを接続詞の意味分析に固定し、私自身も意味分析を行いながら学生指導をしていきました。このことが結果的に、日本語の形と意味の問題に談話という観点を持ちこみ、かつ、語、文、談話という言語単位の関係について考える契機をもたらしてくれたといえます。

4.2 接続詞からみた談話の形と意味

接続詞の意味分析を行うと、談話における形と意味の問題に触れざるを得ない、ということに気づきました。たとえば、「しかし」という逆接の接続詞を例にとって説明します。

- (1) 私、しかし、あなたも、このことに責任がある。
- (2) 朝の雲、しかし、夕方の雲も、どちらも好きだ。
- (3) 今日は、早くに起きた。しかし、ゆっくり食事を作れなかった。

接続詞は、前件と後件を結びますが、形の点からみると、(1)では「私」「あなた」という語を結び、(2)では「朝の雲」「夕方の雲」という句を結び、(3)では「早くに起きた」「ゆっくり食事を作れなかった」という文（節）を結んでいます。つまり、接続詞というのは、語、句、文という階層の異なる単位のいずれも結ぶことができます。それだけではなく、(1)(2)の接続詞は文内に収まっているので文論の対象ですが、(3)では文を越えて、文と文を結んでいるため談話論（当時は文章論）の対象となります。そのため、形の点からみると、語論と文論と談話論に別々に取り込まれてしまうことになるのです。

しかし、種々の形を結んでいたとしても、(1)～(3)で使用されているのは「しかし」という同じ1つの接続詞です。研究の行先がばらばらになることを回避するには、どうしたらよいでしょうか。それには、「しかし」という1語が、前件と後件を結ぶという点のみに注目し、どのような前件と後件を、どのように結べるのか、という問いを立てるしかありません。これは、「 しかし 」のようにとらえて、空白の前件と後件の性格を考える問題に転換できます。そのように考えると、 という空白は、もはや特定の言語の形を示さなくなります。つまり、形の範囲はあとから与えられることになり、重要なのは、結ばれる意味的な内容だ、ということになるのです。

このように考えることによって、次の「しかし」が有している意義素（意味の中核）を記述できるようになります。(1)から(3)とは別の例を整理し、次に挙げてみます。

- (4) 事故にあった。しかし、怪我はなかった。
- (5) 和菓子は好きだ。しかし、洋菓子は嫌いだ。
- (6) 天気予報ははずれた。しかし、どうしてこの頃当たらないのだろうか。

下線部が、接続詞「しかし」が結ぶ直接的な形ということになりますが、形だけを見ていても、これら3例の前件と後件の共通性は見えてきません。前件と後件が、(4)から(6)で共通している特徴を引き出すには、意味に注目せざるを得ないのです。

そこで、次のように考えました。

- (7) 事故にあった。(ふつうは怪我をする。)しかし、怪我はなかった。
- (8) 和菓子は好きだ。しかし、洋菓子は嫌いだ。
 - ・和菓子は好きだ。しかし、洋菓子も好きだ。
 - ・母はやさしい。しかし、母は厳しい。
- (9) 天気予報ははずれた [そのことを私は言う]。しかし、[別のことを私は言う] どうしてこの頃当たらないのだろうか。

(7)は、() の部分が推論されていますが、文の形としては常に省略されるものです。すなわち、形としては「無」です。この推論部分が前件となり、「しかし」によって後件と結ばれます。このタイプは「電話をかけた。しかし、つながらなかった。」「今日は日曜日だ。しかし、市役所に入れた。」など、日常ありふれてみられます⁴。(8)は、「和菓子」「洋菓子」と「好きだ」「嫌いだ」の2項が顕在していますが、どちらか1項だけでも、「しかし」に

よって対比的に結ぶことができます。「和菓子好きだ。しかし、洋菓子も好きだ。」「母はやさしい。しかし、母は厳しい。」のような例です。(9)は、[]で省略した含意が真の前件と後件であり、この話し手の評価的意見が結ばれていると考えました⁵。これも形は「無」です。「このことを私は言う」「別のことを私は言う」という、形にならない含意の部分が逆接で結ばれています。このタイプは「暑いね。しかし、ビールが美味しいねえ。」「登山は疲れるね。しかし、眺めは格別だね。」などがあり、決して特殊な言い回しではありません。

こうした(7)(8)(9)に共通するのは、「しかし」が、＜前件と後件を「反対」のものとして結ぶ＞ということです。「反対」というのは、対義のほか、いわゆるセット的対義も含んでいます。「和菓子」と「洋菓子」は、それらがセットとして認知されるがゆえに、対概念の読み込みが生ずるものです。セットというのは文化を知らなければ理解できないため、留学生には理解が難しい部分です。「月とすっぽん」「そばとうどん」「大家と店子」など、文化理解がないとセットとは認知されません。逆にいえば、話し手によって対義と見立てられ、それが聞き手によって承認されれば、比喩的な表現も「しかし」で結ぶことができるようになります。「近松はいいね。しかし、シェークスピアもいいね。」など。近松とシェークスピアはセット語ではありませんが、話し手が、作品の観点から日本と西洋を対比させて対概念を見立てれば、談話レベルの表現として自然な用例となります。接続詞の理解には、こうして、話し手と聞き手、という要素が持ち込まれることになります。ここが、1つの重要な点です。

上記をまとめると、接続詞「しかし」は語であり、／しかし／という形と＜前件と後件を反対の関係で結ぶ＞という意味があります。つまり、語である限り、定まった形と意味を有しています。それに対して、接続詞「しかし」という語が結ぶ前件と後件すなわち「」に目を転じると、形は不定（語、句、文のいずれも可）、意味は「しかし」が結ぶ作用域であって、前件と後件が「反対」の関係にある、という点で一定していることになります。「」のなかの前件と後件は、実際に使用されていることばの総体（談話）を見たときに範囲が定まるものですから、これは談話レベルの事象として捉えることができます。談話レベルに目を転じて接続詞の使用を見たときに、見えてきたものがこれでした。すなわち、接続詞を使用して産出された談話レベルで観察すると、「一つの意味をもっているが、その形が不定である」という現象が取り出せることになります。

定まった形と意味をもっているという特徴は、語という単位に適用される原則です。談話レベルの事象では、ことばの形が不定で意味は一定という現象があることを明確に理解した研究経験でした。そして、このように形と意味のありかたを再考する必要があることは、それまでの言語学では必ずしも真面目に論議されていなかったのです。

⁴ 推論的逆接と名づけたこの現象そのものは、坂原（1985）が発見したものです。

⁵ 佐藤（1987：52）は、この用法を「（今話している話題とは異なるが、）シカシ私は違うことを言う」とだけ述べています。

5. 日本語音調の研究

5.1 言語の第1の形である音声

外国語として日本語を話すときに、日本語らしい音調で話せることは大切です。慣れた人にとっては聞きやすさはさほど問題になりませんが、異文化接触体験が少なく、外国人の発音に慣れていない日本語人にとっては重要です。

ある時、同僚から、よく努力する学部留学生が1人居るが、話し方のなめらかさに欠けるため聞きにくくて困っている、何とかならないか、という相談を受けました。これが、日本語の音調について、本気で取り組む契機となりました。

音声は言語の第1の形です。文字は第2の形といってもよく、言語の形の本質は音声にあります。同僚から受けた個別の日本語相談は、まだ音声学的に解明されていませんでした。そこで、ちょうどその時いただいた半年間の内地研究を利用して、深く考えてみることにしたのです。2000年9月のことです。

研究では、問を立てることが重要になります。問の立て方で、答えの方向性が違ってくるからです。この相談事例では、話すことばの総体が聞きやすいかどうか、という判断をしていました。話すことばの総体とは、すなわち、談話ということになります。そこで、一番大きな問として、「私たちは、どのように話しているか」という問を立てました。このように問うと、私たちは、分節的記号列（文字で書ける部分、以後記号列）と、超分節的音調列（声の調子）を、同時に繰り出しながら話している、ということに気づきます。この音調列は、記号列全体のうえにかぶさっているので、超分節的単位、というように名付けられています。

超分節的単位としてまず思い浮かぶのは、アクセントです。日本語の東京共通語のアクセントは、1語のなかで拍相互の高低が異なっています。○は相対的に低く、●は相対的に高く発音されるところを示すと、「箸が（●○▷）」「橋が（○●▷）」「端が（○●▶）」となります。しかしながら、アクセントを覚えて使えるようになって、日本語の自然さには至らない、ということにまず気づきました。

超分節的な音調には、ほかにイントネーション、プロミネンス、インテンシティー、フットなどがあるとともに、強弱、音色などパラ言語と呼ばれる規則化されない音調もあります。また、アクセントは表現にはかわりませんが、これらの音調群は、意味内容との密接な関わりをもっています。

5.2 伝達内容に形を与えるイントネーション

たとえば、次のような記号列と音調列を例にとって説明いたします（例は東京共通語）。

「これは、私の妹です。」という記号列は、「これ」「は」「私」「の」「妹」「です」という語がつづりあわされて文となっています。アクセントは、語に付随し、かつ、形として定まっています。まず、(1)を御覧ください。○が低く、●が高く発音されます。アクセントは、語（あるいは文節）ごとに定まっています。（「です」の末尾母音が無声化すると、下記の聞こえになります。）

- (1) これは / わたしの / いもうとです
 ○●▶ ○●●● ○●●●▶▶

さて、「/」で切ったアクセント単位を、そのまま続けて談話として発話すると、(2)のようになります。しかし、小学生の読み上げのように稚拙な印象を受けます。(2)では、「☞ (白い指記号)」が指すように、「わたし」の「わ」、「いもうと」の「い」の箇所はどちらも、「わたし」「いもうと」という語アクセントの通りに低く表現されています。

- (2) これは わたしの いもうとです
 ☞ ☞
 ○●▶ ○●●● ○●●●▶▶

次に、(1)は、談話表現として(3)(4)のようにも発話できます。

(3)は、「わたし」の「わ」が低く語アクセント通りですが、「いもうと」の「い」は前の音に合わせて高く表現されており、語アクセントの上がり目が消えています。「■ (黒い指記号)」のところを御覧ください。

(4)はそれと異なり、「わたし」の「わ」が前の音に合わせて高く発話されており語アクセントの上がり目が消えています。「■ (黒い指記号)」を御覧ください。それに対して、「いもうと」の「い」は低く表現されており、語アクセント通りです。「☞ (白い指記号)」を御覧ください。

以上のことから、記号列の上に語アクセント列がかぶさり、さらにその上にイントネーション列がかぶさって、語アクセントの位置を消したり生かしたりしていることが分かります。川上泰先生が20世紀中葉にすでに発見されましたが、その後長く認められることはなく、また、談話論としての解釈は成されておりませんでした。

- (3) これは わたしの いもうとです [これは、私の「妹」です。]
 ☞ ■
 | ○●▶ | ○●●● ●●●●▶▶ |

- (4) これは わたしの いもうとです [これは、「私」の妹です。]
 ■ ☞
 | ○●▶ ●●●● | ○●●●▶▶

さて、(3)と(4)では発話の意味が異なっています。(3)は、姉ではなく妹である、という意味内容が自然に表現されます。また、(4)は、だれかの妹ではなく私の妹である、という意味内容が表現されています。このふたつの意味内容の違いは、母語話者であればごく自然に分かります。(3)(4)は記号列が同一であるにもかかわらず、異なった意味内容が生じるのはなぜでしょうか？それは、イントネーションという音調列の形の違いによる、ということしか考

えられません。

つまりは、イントネーション列の力で、アクセント列の上がり目を消したり生かしたりすることによって、簡単に、談話表現の形のまとまりを変更することができるしくみがあるというように整理できます。そしてまた、形のまとまりにしたがって、表現されている意味内容が変更されていることも指摘できます。

これが、イントネーションのもつ重要な働きです。イントネーションは、語アクセントの上がり目の位置を消すか生かすかという二者択一的な操作をすることによって談話の形を変更し、伝達内容の意味的まとまりを時間の経過とともに自由に刻んでいく働きをするのです。これは音声文法といわれるものの1例です。

さて、時間の経過、換言すれば、談話の産出過程に注目すると、話し手のなかで形と伝達内容は、どちらが先にあるのでしょうか。話し手は、伝えたい内容を考えながら話していきます。つまり、伝達内容が先にあって、それが形となって時間的に実現していくという動きです。この場合は、伝達内容を考えながら、イントネーションという音声の形が与えられていく、と考えることができますでしょう。「日本語で話す」ということは、このように捉えられます。

イントネーションは音声であることから、時間とともに繰り出されていきます。そこで、形と意味の関係に時間軸を導入する必要があることが重要点の1つです。つまりは、談話というものは、伝達内容が、形となって実現していく時間的な動きの過程として捉えることができるのです。「イントネーションの力で語アクセントの上がり目を消すと伝達内容のまとまりが続く」という音声文法にしたがって、形はそのつど話し手によって新たに選択されていくといえるでしょう。形は不定であり、伝達内容に従ってその都度決められていく、という側面が見えてきた体験でした。

6. 談話論と命名

少し横道にそれます。このころ、研究が蓄積されてきたため、『日本語談話論』という研究書をまとめました。「談話」という用語はそれまでにもありましたが、「談話論」という学術用語はなく、造語して書名としたものです。ちなみに「会話分析」「談話分析」「語用論」などの領域はありましたが、いずれも私が考えるものとは違っていたため、学問体系の構築には、かなり苦心いたしました。構想し始めてから、これでよしという領域名つまり「談話論」と命名できるまでに約2年を要したように記憶しております。刊行後に、『日本語文章・文体・表現事典』『日本語学大辞典』に「談話論」が立項されました。

拙著『日本語談話論』は約50万字を費やしましたが、しかし、まだ富士山の五合目という感じがぬぐえませんでした。談話は、音、語、文、という単位より上位に来る単位ですから、より下位の単位がどのように関係して、より上位の単位を形成するのか考えなければなりません。つまりは、言語のすべての単位を視野に入れる必要があります。

研究的に進むべき次の道をさがすには、人生の長さと相談して一番有効な道筋を選ぶ必要があります。半分は私のなかの何かに突き動かされていましたが、もう半分は、耳を澄ませてもっと大きな声が響くのを待つ状態でした。

7. 日韓中対照談話論の研究

7.1 贈呈品の形と意味

次のテーマは、思いがけないところから降りてきました。

韓国からの学部留学生1名を始めて迎えた年、恒例のゼミ合宿をスキー研修から急遽ソウル市研修に変更いたしました。留学生の母国を知る必要を感じたからでした。その時思い出したのが、大阪の研究会で交流のあった若手研究者です。帰国後、新設された韓国カトリック大学日本語学科教員になられたことを思い出し、連絡してみたのです。すると大歓迎のことです。その後10年以上続いた、沖研究室と姜研究室の学生交流の始まりでした。この時のことは、『信大日本語教育研究』第1号を編集し、記録にとどめました。信大機関リポジトリでもお読みいただくことができます。

これをご縁に、信州大学と韓国カトリック大学は大学間交流協定を締結し、1年間の交換留学生を相互に派遣、受入することになりました。信大からも留学し、また、日本語教育学研究室には韓国カトリック大学から年に5人を定期的に受け入れることになったのです。

継続して5年目を迎えたとき、11月の終わりに沖縄旅行をしてきたとあって、交換留学生の1人からお土産のチョコレートをもらいました。温かく嬉しい思いに満たされ、私からも何かお返しをしたいと願ったのです。そこで、松本の元旦の福茶の習慣などを説明しながら、年の暮に新年の和菓子を手渡したのです。ところが驚いたことに、その学生は「どうして先生は、すぐに物を返すのですか？」と真剣な怒りをぶつけてきたのです。「私は、何か貰いたいと思って沖縄のお菓子を先生に渡したわけではありません。どうして、私の気持ちをただ受け取ってくれないのですか？」と言うのです。優しく、意欲的な学生ですので、私に真面目に何かを訴えたいと思っているのは明らかでした。

そのとき私は、日韓の言語文化の共通点と相違点を、本気になって研究する必要がある、と思ったのです。なぜその学生が私に怒ったのかは、理由があるに違いありません。それを知らずに今後の学生受け入れはできない、と思ったのです。

2000年の初めての訪問以降、韓国カトリック大学の姜錫祐先生の研究室とは、年1回1週間の引率をして寝食を共にする合宿形式の学生交流を指導するようになっていました。教育交流だけではなく、研究交流も行いたい旨を打診したところ、ご快諾をいただきました。7年間を日本で過ごされ大阪大学で博士号を取得されていた氏とは、これが重要な研究になるという見通しを即座に共有できたのです。その後、当時日本滞在中であった北京大学趙華敏先生ともご縁の深いことが判明し、お声をかけて、日本、韓国、中国の言語文化の対照研究が本格的に発足いたしました。

私たちは、まず、最初の問を次のように立てました。①土産という概念は、日本、韓国、中国にあるか？②あるとしたら、その扱いはどのように異なっているか？という2点です。まったく手探りであったため、ごく具体的な問を立てることになりました。その結果分かったのは、次の2点でした。

- (1) 他者を訪問するときに持参する「土産」に当たる品は、日韓中でみられる。それぞ

れ、「みやげ（土産）」「ソンムル（贈物）」「リーピン（礼品）」と呼ばれている。

- (2) しかしながら、「みやげ」「ソンムル」「リーピン」の、行為における意味がまったく違う。

日本の「みやげ（土産）」は、約束をして他家を訪問するときや、旅先で買ったものを渡すときの品物です。旅先の小さな品を渡すのは、旅先でもあなたのことを思っていた、というその思いが渡される側面があります。そして、「もらいっぱなし」は忌避され、次の機会には何等かの返礼があります。

韓国の「ソンムル（贈物）」は、他家を訪問するときや、旅先で買ったものを渡す品物も指しますし、相手への贈り物全般を指す語でもあります。これらは、贈る人自身の気持ちに合う品物が選ばれます。古い世代の人々は、他家を訪問するときには、目立たないようにそっと玄関の脇にその品を置いて、話題にはしないようです。他方、相手のためにわざわざ心を砕いたということを強調する場合もあり、その時は、その入手がいかに困難だったか、いかによい品かを説明して渡す場合もあるようです。いずれの場合にも、相手を思って自分が気に入った品を選んだものが「ソンムル」になります。その相手の気持ちに応えるために同等程度の物を返す、という習慣はありません。心に留めて相手に尽くす、という展開になるようです。

中国の「リーピン」は、何かを依頼するときに持参する品物です。依頼に先立って渡されることが多いようです。また、いかによい品物なのかを説明しながら渡されることも多いようです。

このように、「品物」という一定の形がもつ意味は、日本と韓国と中国で異なっていました。いわば、「気づかれにくい方言」のような状態が認められたのです。形は一定でも、意味・用法がずれる、しかも、そうした差異があることに気づかれていない、というケースです。くだんの韓国からの留学生は、自分の気持ちを表現するための「ソンムル（贈物）」として私に旅先のチョコレートを贈ったのに、和菓子ではあっても同じ菓子という形で私が返したために失望したのだ、ということがようやく分かりました。

7.2 依頼談話の形と意味

かえりみるに誰とでも贈答が成立するわけではなく、品物を渡すべき人、渡すことができる人と、適切な機会とが存在します。品物の意味が異なっているということは、人間関係の結び方についての行動のありかたが異なっていることでもあります。すなわち、意識や態度も含めた社会文化が異なっていることになります。物を渡すときの談話表現の違いを比較対照するためには、どうも、社会文化、意識態度、述べる内容、表現そのもののすべてを観察しなければ、品物を渡すときの表現やふるまいが理解できない、ということになります。それが研究上の次の課題になりました。

先におこなってきた、記号列と音調列が時間的に同時に操られて進行していった研究をふまえて発展させ、A層の社会文化、B層の意識態度、C層の談話内容、D層の談話表現の4層が同時に操られて実際の談話が表現されるという、談話の同時結節モデルが生まれたのもこの時でした（図1）。

時間的展開⇒⇒⇒⇒

A	社会文化	
B	意識態度	
C	談話内容	
D	談話表現	

図1 談話の同時結節モデル（部分）

素朴なモデルではありましたが最も重要な点を単純化してとらえようとしたのです。そして、新たな問を「日本と韓国と中国では、どのように頼むか」というように立てました。頼みかたの社会文化も、その時の意識態度も、何を言語化するかという談話内容も、ことばとなって現れる談話表現も、すべて違っているのです。対照研究とは誠に難しいものです。

中国語、韓国語、日本語は、言語系統の点では別系統に属します。しかしながら、歴史的に長期にわたる交流があるため文化が似通っており、言語連合（language union）の関係にあります。見通しとしては、中国と日本はかなり隔たっている、韓国はその中間的特徴を示す、というものでした。

そこでまず、中国語と日本語の依頼談話を比較対照してみることにしました。特に、中国からの留学生の日本語作文が、異文化接触問題を引き起こすことが指摘されていたので、そこに焦点を当ててみることにしました。そして、分析結果を得たあとに、日韓中の大学生を対象とした1000人調査を行って検証することにしました。

まずは、収集しやすいメール談話を集め、そこに見られる特徴を比較検討してみました。AからDの4層すべてが異なっているため、統一した条件を示して、その時どのように言いますか、という調査方法は成立しません。「依頼談話」という網にかかるものを収集してみただうえで、それぞれの特徴を内省観察も加えて分析する方法をとったのです。

中国語依頼談話の例を挙げてみましょう。(1)は、指導教員に推薦状を依頼するメール、(2)は、かつての教え子に、卓球教師を求めている友人がいるので探してほしいと頼むメールです。できるだけ直訳を示しました。

- (1) 大学生から先生へ（推薦状の依頼。大学教員は、推薦状を書くことを断ることができる）

亲爱的宋老师：

您好。有关推荐信的格式和纸张我已经确认过了。没有特殊要求，中文写即可。内容如有不妥的地方，烦请老师修改。谢谢老师了。

張建国

親愛なる宋先生

こんにちは。推薦状の書式と紙のサイズは確認しました。特別な決まりはありません。中国語で書いていいです。内容には適当でないところがあれば、ご面倒ですが直してください。先生、ありがとうございます。

張建国

(2) 先生からかつての教え子へ（卓球指導者を紹介してほしい）

你好！我是温唯。

我有一个特别喜欢打乒乓球的朋友，他给我母亲看过病，现在想找一个高手指导他一下，费用按你们的行情，你能帮我介绍一位吗？你如果方便最好，你帮我找找呗，拜托啦！

こんにちは。温唯です。

私には卓球の大変好きな友達がいます。彼は母の病気を治療したことがあります。卓球を指導してもらえる達人を探しています、費用はあなたたちの相場に従います、あなたは私のために一人紹介することができるでしょうか？あなたの都合がよければなによりですが。適任者を探してみてくださいね、よろしくお願いしますね！

(2)では、なぜ「彼は、母の病気を治療したことがあります」と言うのでしょうか？また、(1)(2)とも、なぜ依頼する経緯や条件をはっきりと述べるのでしょうか？この2点が私たち3名の研究会議で検討されました。すると、興味深いことが分かったのです。

中国では、積極的に依頼する行為を通じて人間関係を作ったり深めたりしていく習慣がある、ということです。その場合、まず先に相手に依頼をします。その時に持参されるのが「礼品」になるのです。また、その人間関係を維持しようとした場合には、全力で相手の依頼をかなえようとします。このときに働く意識が「面子」です。そしてこうした人間関係がお互いに成立すると、次に自分が依頼するときには、相手は断らないことが前提になります。依頼は断られないため、何をどこまで頼むのか、経緯や条件をはっきり述べるのが丁寧だ、という意識を抱くことになるのです。そうした人間関係が社会文化としてあるため、「母の病気を治療し」てくれた友人の頼みを必ずかなえる必要があるための依頼であることも明確に伝えることになります。

中国では、依頼という行為は人間関係の紐帯を強化し、情を通わせるためのよい行為だ、という感覚があることも分かりました。私たちは、こうした社会文化と意識態度のありかたを、「互惠の慣習」と名付けました。

それに対して、日本ではどうでしょうか。次のメールを見てみましょう。(3)は、指導教員に面談予約をする大学院生のメール、(4)は同窓会事務局員が、高校の後輩に講演講師を知り合いに頼んでほしいとしているメールです。

(3) 大学院生から指導教員へ（発表指導のためのアポイントメント取得依頼）

伊藤先生

ご連絡遅くなり申し訳ありません。

シンポジウムに向けてのアポについてですが、先生のご都合がよろしければ、来週お時間いただけたらと思います。

私は、火曜2コマと木曜5コマは授業がありますが、その他の時間であればいつでもかまいません。

お忙しい中、申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします。

小山春子

- (4) 高校の山川先輩から野村後輩へ（高山さんへの同窓会サロン講演依頼。山川氏は、同窓会事務局員。）

野村様

あれこれ、あれこれ、

ありがとう。

高山さんにサロン話題提供を、

できたら、12月8日、

野村さんからお願いいただけたらと思います。

OK いただけましたら、

私のアドレスを高山さんにお伝えください。

日本語月間となることを願いつつ

お忙しいところ、重ね重ねのお願いです。

山川

日本では、個人的な依頼は、できるだけ避けた方が賢明である、という意識が主流ではないでしょうか。何か品物をもらったら同程度の品で返礼するという習慣をみると、借りっぱなしにしない、という意識や態度がみられます。これは互惠ではなく文化人類学でいう「均衡的互酬」ととらえたほうが適切です。

こうした社会文化が要因となって、談話内容や談話表現の選択に影響し、談話の形が異なっていく、という側面があります。人間関係はシーソーのようにバランスをとっており、依頼をするとそのバランスが崩れるという感覚（井上2013）でしょうか。そのため、日本語依頼談話では、状況と心情をそれとなく伝えていくことで、相手の察しを待つ依頼表現が選択されています。「聞き手との共有知識を確認しながら、自明のことは言わないように話すことがていねいである」という意識があり、この意識に沿った談話内容と談話表現が選ばれています。ちなみに、私たちが2018～2019年に行った信州大学の学生約350人と北京大学等の大学生約500人を対象とした調査では、「はっきりとものを言うことが、ていねいだ」と思う日本人学生47.2%、中国人学生97.4%であり、そう思わないという大学生は、日本人学生52.8%、中国人学生2.6%という明確な結果が得られています。

以上、社会文化の影響によっても談話の形が変わる、ということをお話いたしました。

8. 談話構築態度からみた形と意味

8.1 世界の見方と形のつくりかた

ことばを用いるときに重要なことは何でしょうか。「伝え合い」つまり事柄の伝達が最も重要なことは言うまでもありません。しかし、同時に「通じ合い」つまり感情の共有が重要なことは、案外見落とされがちではないでしょうか。これは、先にみた社会文化の影響で形が変化することより、さらに目に見えにくい意識態度のありかたが関係してきます。

外国語として日本語を用いている人々と話すと、感情の共有が、まさに言語使用に左右されていることをありありと実感することがありました。たとえば、超上級に達しているから

こそ気にかかる日本語の使い方が原因で「相手のことを見て話していない」としばしば感じさせられたときです。母語は中国語で、日本語話者の私の感情が満足感を得られなかった場合です。逆のこともありました。日本語を母語とする私は相手のことをたいへん大切な友人だと思い通じ合いに満足しているのに、韓国語が母語の相手から、まだ十分に友達になれていないような気がすると言われたときです。

そもそも話すときに、話し手は、どのように世界を見ているのでしょうか。話し手とは、世界を見る唯一絶対の視点です⁶。それを「私」のように括弧で囲んで記すことにします。「私」の五感と意識がなければ、「私」の世界は存在しません。話すというのは、ほかの誰でもない「私」が、自分の身体にそなわった五つの感覚と意識を用いて世界をとらえ、今、ここで、ことばを繰り出していくことです。他者とは、唯一絶対の視点である「私」の世界に登場する他者ですから、もし「私」がこの世界から居なくなれば、「私」の世界に登場している他者も居なくなります。その意味で、他者とは「私」の五感と意識の中に登場する人です。換言すれば、「私」と他者は、知覚を考慮に入れると二つの等価な存在ではありません。「私」と（「私」にとっての）他者は、鏡像にはならないのです。

話すということは、唯一絶対の視点を有した話し手が、「私」の世界に登場する聞き手に対してことばを用いていくことです。このことは普遍的な真理であるといえるでしょう。

しかしながら、「私」がどのように他者を遇するか、つまり話し手がどのように聞き手を位置づけてことばを使用していくかは、どうも、言語によって異なる傾向性があるようです。これに最初に気づいたのは、認知言語学です。

英語では、「私」とは離れた位置に空想の視点を置き、話し手と聞き手を等距離に見て話します。それに対して日本語では、「私」という話し手の目が見たままを描写していく表現がよく選ばれます。ちょうど映画のカメラを回しているような表現で、話し手自身の姿はことばの上からは消えてしまいます。前者を客観的把握、後者を主観的把握、と呼びますが少し分かりにくい命名です。池上（2007：317）に川端康成「雪国」の冒頭文での説明がありますので、引用してみます。(1)が冒頭文、(2)がその英訳です。

(1) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

(2) The train came out of the long tunnel into the snow country. (E. Seidensticker)

(1)では、話し手は汽車の中に居て、動く汽車と一体になって外の世界を見ているように言語化されています。これが、目で見えるままに言語化する日本語の1例で、主語は消えており、主観的把握の文です。それに対して(2)では、話し手の視点は車外に置かれており、汽車がトンネルを通る様子を外から見るように言語化しています。これが英語的な表現の1例で、客観的把握の文です。両者を比べてみると、文という形にする以前に、世界の見方(construal)そのものが異なっていることが分かるでしょう。つまりは、言語という形になる以前の、世界をとらえる段階で見ている形が、使用言語の影響で異なっていることになり

⁶ 世界を見る唯一絶対の視点である「私」という考え方は、哲学者永井均の一連の論考を参照しています。川端康成『雪国』の冒頭文を挙げて、池上（2007）は認知言語学からの考察を行いました。永井（2018）は、西田幾多郎解釈を展開しながら哲学の立場から考察しています。

ます。

8.2 文法という意味規則にそって形がつけられること

私たちの共同研究では、文より高次の談話を対象としますので、聞き手や場面が重要になります。そこで、話し手が聞き手や場面をどのように意識して話すのか、という問を立てました。すると、日本語と韓国語、中国語では、話し手の世界の見方が違うということが明らかになってきたのです。ここでは、日本語と韓国語を例にして説明します。

簡単に言うと、日本語は、次の三項関係の見方をします。三項関係とは、言語心理学の浜田（1995）が子どもの言語獲得の普遍的モデルとして提示したものです。

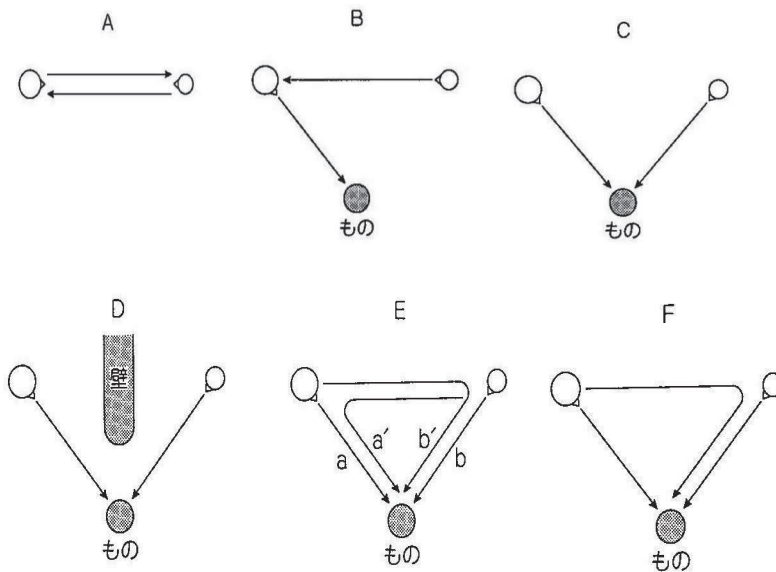


図2 浜田（1995）が提唱した子どもの言語獲得に関するモデル

図2のAは、母親と子どもがお互いに向かいあっている図。Bは、母親がものを見ているのを見ている子どもの図。Cは、母親と子どもが、ひとつのものを見ている図。Dは、母親と子どもが同じものを見ているが、壁があるため、お互いが同じものを「ともに見ている」ことにはならない図です。このことから、浜田（1995）は、母親と子どもが、「ともに見ている」ことの重要性を説き、図Fを提示しました。すなわち、図Fのように、母親も子どももともに同じものを見ているが、母親は、子どもがものを見ている様子も見えていること、それが、「ともに見ている」ことの重要な点だとしたのです。図Eでは、母親だけではなく、子どものほうも、母親がものを見ている様子をも含めて見えていることが分かります。つまりは、母親のものへの視線や接し方を見ることによって、子どもは、ものの方や接し方（すなわち浜田のいう意味）を獲得していくとしたのです。

図2 Eのモデルは、日本語人には簡単に理解されますが、韓国語人研究者にはなかなか理

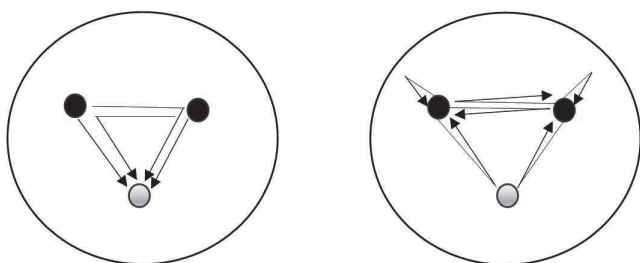


図3 日本語の談話構築態度（沖・姜2018より）

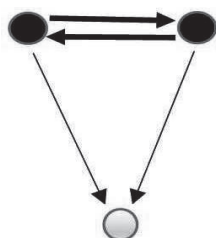


図4 韓国語の談話構築態度（沖・姜2018より）

解されませんでした。韓国語人は、このような世界の見方をしていないようです。

日本語では、三項関係を取りまく場面というものが意識されており（図3左の円の部分）、場面のなかで自分がどのような位置づけで居るのかも見ています（図3右）。両者を重ね合わせたものが日本語の見方です。それに対して、韓国語では、場面を共有している感覚が薄く、話し手は聞き手である相手そのものに注目しており、両者の距離も日本語より近いようです（図4）。

話し手が聞き手と場面をどのように見ているかを、私たちは談話構築態度と名付けました。談話構築態度とは、談話を産出するときの構えですから、それに沿ってことばが選ばれていく文法です。文法は目には見えませんが、ことばの使用を支配する規則です。こうした規則に沿って動的に様々な形が選ばれていく、と考えればよいでしょう。これが、言語の形にどのように影響するか考えてみましょう。

たとえば、話し手が聞き手の手許をのぞき込みながら会話する場合、日本語では名詞1語文が言えますが、韓国語では言えないという指摘があります（生越2018）。名詞1語文とは、「どうする、どんなだ、なんだ」に当たる述語がない文です。

日本語会話では、相手の手許をみて(3)のように「コーヒー？」という名詞1語文を用いることができます。日本語では、相手が見ている見方に沿って「コーヒー」を見ているため、話し手が「コーヒー」について何を言いたいかまで言語化しなくても、聞き手は話し手の意図を補完的に理解できると考えられます。お母さんが赤ちゃんの喃語を聞いて言いたいことを察する、つまり補完的理解を行うことと同様です。

しかし、韓国語会話では相手の手許をのぞき込んで言う場合でも、(4)のように「コーヒー？（커피?）」という名詞1語文を使うことができません。（コーヒーを医者から止めら

れているのに飲んでる友人をみて驚き、思わず声が出るような場合は例外です。) (5)から(8)のように、「コーヒーなの (커피야?)」「コーヒーがおいしそうにみえる (커피 맛있어 보인다.)」「コーヒーおいそうだ (커피 맛있겠다.)」などのように、「何がどんなだ」まで言わなければならないのです。韓国語でも名詞 1 語文はありますが、質問に対する答えなどのように、述語が言語的形として簡単に復元できる時に限られます。(「(質問) それは何だ? (答え) コーヒー」) それではなぜ、この場合に「コーヒー? (커피?)」が言えないのでしょうか。確かに、話し手も聞き手も手許をのぞき込んで視認しています。しかし、韓国語の談話構築態度では、聞き手は話し手の見方に沿ってコーヒーを見ているわけではありません。三項関係による補完的理解は成されないため、そこでコーヒーに対して話し手が思っていることを、はっきりと述語のある文で伝えなければならない、と考えられるのです。

相手の手許をのぞき込んで会話する場合

日本語(3)○ コーヒー?

韓国語(4)× 커피? (コーヒー?)

(5)○ 커피야? (コーヒーなの?)

(6)○ 커피 마셔? (コーヒー飲んでるの?)

(7)○ 커피 맛있어 보인다. (コーヒーおいしそうにみえる)

(8)○ 커피 맛있겠다. (コーヒーおいそうだ)

こうした世界の見方そのものの違いが要因となって、談話の形に微妙な違いをもたらし、それが感情的な満足感にも影響を与えていくと考えられます。多くの実例を挙げて検証しましたが、ここでは割愛します。

9. 表現と理解からみた形と意味：内言と外言に触れて⁷

9.1 形が不定である談話表現

さて、接続詞、イントネーション、依頼談話、談話構築態度といったものを例にして、形と意味の関係が決して固い結合を成しているのではない談話の世界をみてきました。

それでは、表現（産出）と理解（解釈）をどのように考えたらよいでしょうか。先行研究では、表現と理解は、逆回しつまり方向性だけが逆の同じ活動だと考えられてきました。しかし、形と意味の点から検討してみると、そうとは考えられません。

表現過程と理解過程について考察するには、内言と外言を考える必要があります。言語には、他者とのコミュニケーションに用いる外言とともに、認識や思考にかかわる内言という重要な二つの働きがあります。談話とは、文法的意味の束（以後、意味あるいは文法）を用いて、話し手の心的世界に形を与える過程です。このとき、心的世界を探索、編成し形象化していく過程は、思考し認識する働きそのものであり内言です。内言の形は観察できませ

⁷ この部分の考え方は、永井（2018）とは異なっています。論者にとって永井均氏は信州大学での、浜田寿美男氏は花園大学での同僚でした。学恩に感謝します。

ん。他方、心的世界を談話という言語的形にして他者に伝える働きが外言です。表現過程とは、内言をくぐり外言へと続く一連の動きであると考えする必要があります。

表現過程の談話の形は、心的世界と連動して常に動いております。表現は話し手が「私」の心的世界を探索、編成して伝達内容を準備し、文法的意味の束を用いて、それを談話という形へと作り上げていく過程です。「私」の心的世界にある伝達内容を伝える形は幾通りもの選択が可能であり、そこからたまたま一つの形が音声になるにすぎません。たまたまその形になったとしても伝達内容の表現形として唯一絶対のものではなく「私」の判断のゆらぎがあることに注目すると、表現における形は「不定」が本質であると述べるができるでしょう。分かりやすい具体例として書き言葉を上げます。書き言葉の推敲とは、種々の選択肢から形を選んで決定していく過程です。語や文は適切な1つを選ぶ吟味が可能ですが、無である形も含めて、言いたいことを伝える談話の形は1つではなく、様々な実現形が可能なのです。この意味で唯一絶対の視点である「私」がおこなう表現では、形は「不定」と言ってよいでしょう。

9.2 形が定である談話理解：鏡像ではない表現と理解

理解過程は、「私」にとって「他者である「私」」が表現した形を手がかりに行われます。すなわち「私」にとっては、他者が産んだ談話の形はすでに定まったものとして知覚され、それをもとに理解という動きに入るといってよいでしょう。

談話理解過程は、外言において定まった談話の形を知覚することから始まります。ちなみに、社会言語学的にみて、話し手の言語と聞き手の言語が異なる場合、外言の伝達には次の4種類のいずれかが選ばれます。①話し手の言語Aを双方が使用する、②聞き手の言語Bを双方が使用する、③第3の言語Cを使用する、④話し手は言語Aを、聞き手は言語Bを使用する、というものです。

たとえば、話し手Aが英語で、聞き手Bが日本語で、お互いに会話することが可能です。産出能力と理解能力がアンバランスである場合には、こうした会話状態はめずらしいものではありません。さらにいえば、相手言語の規則にしたがった理解が完璧でなくても、実態として近似値の伝達は可能です。つまり、Aの英語が完全に分からなくても聞き手Bは近似値的理解をして会話が進んでいくことがあります。そうしたコミュニケーションが、実は人間言語のふつうの姿だという考え方に私は賛同いたします。

話し手が同じ言語共同体に属していても、たとえば日本語同士の場合でも、「私」と「私」の言語は同一ではなく、それぞれに異なる個人語を用いて言語を使用していると考ええるものです。ラングは否定され、唯一絶対の視点をもった「私」の集積が言語共同体であるという意味はこれです。

「私」の表現過程として実現していく、内言から外言へとつながる固定した形のない動きの姿が、表現過程における談話という形であります。それに対して、他者の表現した談話は、「私」にとってはすでに形が定まったものとして受け取られるといえます。この点で、談話の表現過程と談話の理解過程は、同じ動きの逆回しであるとは到底言えません。鏡像にはならないのです。表現と理解は、別個の性質をもつ参加者が別個に行う動きと考えることが妥当だと私は考えます。

理解過程では、外言として形の定まった他者の談話から伝達内容を理解していく動きが認められます。このとき、理解を行う「私」のもつ文法的意味の束と同時に、談話産出者であった他者のもつ文法的意味の束を想像的に援用しながら理解を行っていると考えられます。理解は二重の意味解釈が同時になされており、この点でも、談話産出と談話理解は鏡像にはならないと考えるものです。

9.3 談話のもつ影響力

ことばの声とは、ことばの形です。表現過程は内言から出発しており、唯一絶対の視点である「私」が、「私」の心的世界を探索、再編しつつ形を模索するものです。「私」が「私」の内言を活性化することにより、心的世界における成長変容があります。他方、談話の理解過程を考えると、「私という「私」」にとって「他者の「私」」のことばは聴覚映像として定まったものであり、その理解を通して「他者の「私」」のことばが「私という「私」」の心的世界に取り込まれていきます。よくもわるくも、「他者の「私」」のことばが「私という「私」」の心的世界に影響を与え心的世界の再編を促していきます。こうした心的世界再編への影響を「感化」と呼ぶことにします。

言語の機能は、ビューラーやヤコブソンによって考察されてきました。諸説ありますが、「伝達の機能」「表出的機能」「交話的機能」「メタ言語的機能」「属性表示機能」「詩的機能」などが挙げられています。外言と内言の接点に注目するなら、私はここに言語の「感化的機能」すなわち、ことばが内的世界を整形再編していく過程においてお互いに人間と人間が影響を与え合う力、というものを加えたいと考えます。

10. まとめ：語の形と意味、談話の形と意味

このようにして研究をふりかえってみますと、すでに研究史上定説となった語の形と意味に比べて、談話の形と意味、というものを新たに考えてみる必要性を感じます。

語の形と意味は、多くの先行研究をもとに玉村文郎先生が描かれた図がその後の語彙論、意味論の教科書でもよく引用されるところです（図5）。

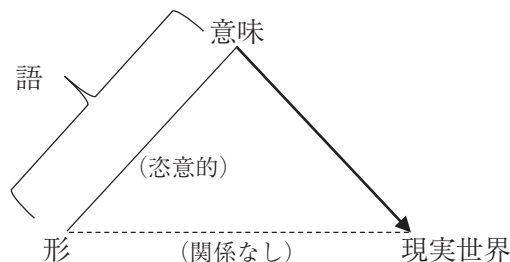


図5 語の三角形（玉村1985：79より引用一部改変）

意味とは現実世界の切り取り方である。

形と現実世界は無関係である。

語は、一定の形と一定の意味からなる。（但し、形と意味の結びつきは恣意的）

談話の形と意味ということを考えてみるのに、語の形と意味に照らすと、次の図6のようなことが言えるのではないでしょうか。

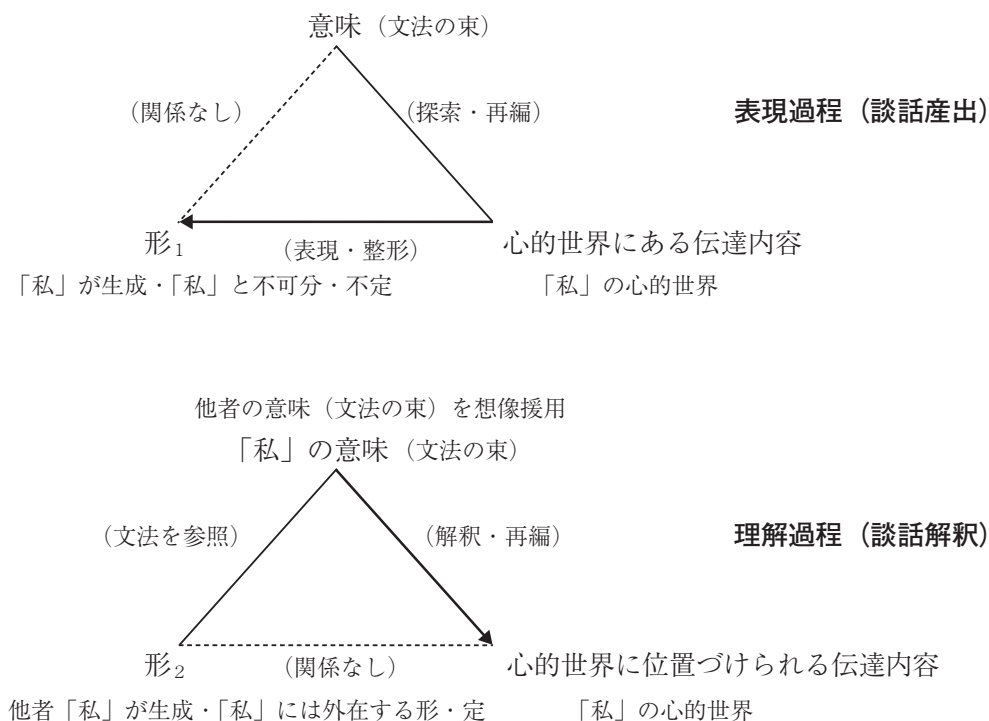


図6 談話の三角形

意表現過程における談話の形と意味

文法という意味規則にしたがって心的世界の伝達内容を形象化したものが、談話の形₁である。

文法という意味規則と談話の形₁とは直接的関係がない。

談話の形₁の実現は内言からはじまり不定である（形は複数可能・完成形が不定）。産出された一回一回の談話という形₁のもつ意味は、記号列の意味とともに記号列を超えて表現される心的世界の伝達である。

形象化は、世界を成立させる唯一絶対の視点である「私」においてなされる。

表現過程は、「私」の心的世界を探索、編成し、表現、整形する。

理解過程における談話の形と意味

話し手「私」が産出伝達した外言談話は、聞き手「私」にとって形₂はすでに定まっている。

形₂は、聞き手「私」の文法的意味の束を通して、聞き手「私」の心的世界で解釈され、聞き手「私」の心的世界の再編に影響する（産出者である話し手の意味も、解釈者である聞き手によって想像的に援用される）。

話し手「私」の心的世界と、聞き手「私」の心的世界は別個である（＝解釈の多様

性は異なる「私」によって必然的に生まれる)。
表現過程と、理解過程は、鏡像ではない。

以上、9節、10節で述べてきた事柄は新規な内容を含んだもので、これからさらに洗練させることが課題となります。ちなみに、本日は、語の形と意味、談話の形と意味、というものを中心にお話しして参りましたが、両者の中間に、文の形と意味、という階層を設ける必要があります。この約10年間、継続して演習のテーマとしてきたのが、終助詞の意味と地理的変異でした。学生の皆さんとともに長く検討してきたこのテーマが、いずれ、私の文の形と意味の再考に結びついていくと考えております。最終講義としては、ここまでいたします。

御礼

大学人に与えられる自由の中で、日本語について分析考察しながら人生を過ごして参りました。研究成果を他者に語る覚悟と責任をもつべきであること、また語ることが学問自体にとって重要であることを、尊敬する師友の交わりのなかで教えられてきました。日々の実践は、若い学生諸兄姉へ向けた講義や研究室での対話となりました。真摯に耳を傾け学ぶ意欲をもった若い方々からいただいていたのは、常に励ましと勇気でした。まことに幸せな道のりであったと思います。

3月をもって学生諸兄姉とは別れますが、一学徒としての研究の道は一生続きます。特に経験科学である人文科学は、60代が黄金の時代と呼ばれます。これからも元気で前向きに、研究的交わりの厳しさと責任を自覚しながら、しっかりと取り組んで参りたいと存じます。

本日は、ご清聴ありがとうございました。

【引用文献】

- 池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』筑摩書房〔池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』講談社を改題〕
- 井上優（2013）『相席で黙ってられるか 日中言語行動比較論』岩波書店
- 生越直樹（2018）「省略現象からみえてくること―「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語―」『社会言語科学会第42回大会発表論文集』社会言語科学会
- 川上泰（1995）『日本語アクセント論集』汲古書院
- 国広哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店
- 坂原茂（1985）『日常言語の推論』東京大学出版会
- 佐藤恭子（1987）「接続詞の分類について」『名古屋学院大学外国語教育紀要』名古屋学院大学外国語教育研究センター
- 玉村文郎〔国立国語研究所〕（1985）『日本語教育指導参考書13 語彙の研究と教育（下）』大蔵省印刷局
- 永井均（2018）『西田幾多郎：言語、貨幣、時計の成立の謎へ』角川書店
- 浜田寿美男（1995）『意味から言葉へ―物語の生まれるまえに―』ミネルヴァ書房
- 水谷静夫（2011）『曲り角の日本語』岩波書店

沖 裕子 主要業績一覧

著書（報告書を含む、書籍掲載論文は別掲）

- 1980年『八丈島方言の研究』東京都立大学国語学研究室（共著：大島一郎・中田敏夫・成田徹男・加藤和夫・加藤久雄・木川行央・沖裕子・坂東多衣子・酒井恵美子）執筆分担：pp.133 pp.134-138 pp.139-141 pp.168-183 pp.199-200
- 1999年『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店（佐藤和之・米田正人編：共著）執筆分担：第1章 pp.18-29 第4章 pp.159-164 第5章 pp.218-224
- 2001年『応用社会言語学を学ぶ人のために』（ダニエル・ロング・中井精一・宮地弘明編：共著）執筆分担：第4章 運用からみた敬語 pp.42-53
- 2002年『東京・大阪方言の談話展開にみる接続詞の役割についての対照社会言語学的研究その1・その2』科学研究費報告書（研究代表者：沖裕子）307Pp.353Pp.
- 2002年『方言文法ガイドブック』科学研究費報告書（研究代表者：大西拓一郎）執筆分担：pp.65-84 pp.103-108
- 2003年『朝倉日本語講座4 言語行動』（北原保雄監修、荻野綱男編）執筆分担：第4章 近隣社会の言語行動 pp.68-88
- 2005年『新「ことば」シリーズ18 伝え合いの言葉』財務省印刷局（国立国語研究所編）座談会 伝え合いの言葉（甲斐睦郎司会、沖裕子、箕口雅博、米川明彦）pp.11-27
- 2006年『日本語談話論』和泉書院 543Pp. 平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費による出版、学位請求論文の公刊、単著
- 2006年『方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究』科学研究費成果報告書（研究代表者：大西拓一郎）執筆分担：pp.69-80
- 2006年『方言文法ガイドブック2』科学研究費報告書（研究代表者：大西拓一郎）執筆分担：pp.69-80
- 2011年『大阪摂津方言若年層談話文字化資料 付CD-ROM：一部音声資料・文字化全電子データ』私家版（共著：中西彩乃・沖裕子）
- 2015年『跨文化理解与日語教育（異文化理解と日本語教育）』趙華敏主編 高等教育出版社：北京特別市 執筆分担：第4章 日本語依頼談話の特徴と日本語教育、国際共著／沖裕子・趙華敏
- 2016年『はじめて学ぶ方言学—多様性をとらえる28章』井上史雄・木部暢子編 293Pp. 執筆分担：第17章 テンス・アスペクト表現 pp.174-184

論文（雑誌掲載論文と書籍掲載論文の双方を混排、共著と記されていないものは単著、）

- 1978年「＜類義語の意味論的研究＞しる・わかる」『日本語研究』第1号 東京都立大学国語学研究室 pp.123-133
- 1980年「共通語と方言の接触—共通語の価値について」『ことばの研究』第1号 長野県ことばの会 pp.1-10

- 1980年「八丈島末吉洞輪沢における待遇場面形成の要因」『日本語研究』第3号 東京都立大学日本語研究室 pp.88-97
- 1980年「共通語の規範的文体性と普及上の役割—「敬体本質性」について—」『都大論究』第18号 東京都立大学国語国文学会 pp.54-64
- 1981年「文法学習の目的とその意義づけ」『解釈』第27巻第5号 解釈学会 教育出版センター pp.53-57
- 1981年「東京都の方言分布」『日本語研究』第5号 東京都立大学日本語研究会 pp.48-63
(共著：木川行史・沖裕子・杉本武・石井直子・川崎裕子) *『日本列島方言叢書 関東方言考(東京都)』ゆまに書房 に再録
- 1985年「動詞の文体的意味」『日本語学』第4巻第9号 明治書院 pp.110-124, 依頼論文
- 1986年「方言イメージの形成」『国文学』第63号 関西大学国文学会 pp.158-172
- 1988年「形容詞の文体的意味」『国文学』第65号 関西大学国文学会 pp.126-134
- 1988年「形容詞における口語と俗語」『花園大学国文学論究』第17号 花園大学国文学会 pp.1-11
- 1989年「人称代名詞と発話様式」『花園大学国文学論究』第18号 花園大学国文学会 pp.1-10
- 1991年「『国語辞典』に収録された「方言」」『日本語論考』大島一郎教授退官記念論集刊行会 桜楓社 pp.306-316
- 1992年「気づかれにくい方言」『月刊言語』第21巻第11号 大修館書店 pp.4-6, 依頼論文
- 1993年「談話型から見た喜びの表現—結婚のあいさつの地域差より—」『日本語学』第12巻第1号 明治書院 pp.44-52, 依頼論文
- 1993年「談話からみた東の方言／西の方言」『月刊言語』第22巻第9号 大修館書店 pp.44-51, 依頼論文
- 1993年「方言談話にみる謝罪的感謝表現の選択」『日本語学』第12巻第12号 明治書院 pp.39-47, 依頼論文
- 1993年「OCRとエディタ検索による個人的フルテキストデータベースの構築と活用」『花園大学国文学論究』第21号 花園大学国文学会 pp.1-21
- 1994年「方言談話にみる感謝表現の成立—発話受話行為の分析—」『日本語学』第13巻第8号 明治書院 pp.28-37, 依頼論文
- 1994年「話し言葉テキストの性格と電子化テキスト化」『情報処理学会研究報告』94巻45号 pp.29-30
- 1995年「接続詞「しかし」の意味・用法」『日本語研究』第15号 東京都立大学国語学研究室 pp.21-30
- 1995年「日本語教育と国語教育の接点—だ・である体の習得について—」『人文科学論集』第29号 信州大学人文学部紀要 pp.131-144
- 1995年「京阪方言における「～ておく」の一端」『ことばの研究』第7号 長野県ことばの会 pp.35-46
- 1995年「勧めの依頼表現について」『日本語学』第14巻第11号 明治書院 pp.42-49, 依頼

論文

- 1995年「気づかれにくい方言の隆盛と俚言使用の二相化」『変容する日本の方言』大修館書店 pp.86-96, 依頼論文
- 1996年「対話型接続詞における省略の機能と逆接—「だって」と「なぜなら」「でも」—」中条修編『論集 言葉と教育』和泉書院 pp.97-111
- 1996年「アスペクト形式「しかける・しておく」の意味の東西差—気づかれにくい方言について—」『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究領域の視点（上巻）』明治書院 pp.30-46
- 1997年「新用法からみた対話型接続詞「だって」の性格」『人文科学論集』第31号 信州大学人文学部紀要 pp.119-127
- 1997年「国内人の異方言・異文化接触—長野県松本市街地在住者の方言意識—」『内陸地域における文化の受容と変容』信州大学人文学部 pp.125-151
- 1998年「接続詞「あるいは」と「または」の意味について—談話展開機能の獲得にふれて—」『人文科学論集』第32号 信州大学人文学部紀要 pp.57-70
- 1998年「接続詞と接続助詞の「ところで」—「転換」と「逆接」の関係性—」『日本語教育』98号 日本語教育学会 pp.37-48
- 1998～1999年「チャレンジコーナー」『月刊言語』第27巻9～12号、第28巻1～2号 大修館書店, 依頼論文
- 1999年「気がつきにくい方言」『地域方言と社会方言』明治書院 pp.86-96, 依頼論文
- 1999年「特集 手のひらの言語学 日常言語をめぐる22の疑問に答える [愛できる] [ごはんとライス] [ていうか]」『月刊言語』第28巻第2号 大修館書店 pp.20-21 pp.60-63 pp.80-83, 依頼論文
- 2000年「アスペクトからみた動詞分類再考—「気づかれにくい方言」にふれて—」『人文科学論集』第34号 信州大学人文学部 pp.51-68
- 2000年「リレー連載 日本の方言探訪 長野編」『月刊言語』第29巻第5号 大修館書店 pp.67, 依頼論文
- 2000年「特集食べ物とことば 中部」『日本語学』第19巻第7号 明治書院 pp.67-69 依頼論文
- 2000年「特集1998・1999年における国語学界の展望 言語生活」『国語学』第51巻第2号 国語学会 pp.96-107, 依頼論文
- 2000年「転勤族の子供の語彙形成」『徳川宗賢先生追悼論文集 20世紀フィールド言語学の軌跡』変異理論研究会 pp.173-180
- 2001年「生き残る気づかれにくい方言」『月刊言語』第30巻第1号 大修館書店 pp.74-81, 依頼論文
- 2001年「談話の最小単位と文字化の方法」『人文科学論集』第35号 信州大学人文学部紀要 pp.55-72a
- 2001年「地域に生きる敬意表現」『日本語学』第20巻第4号 明治書院 pp.58-67, 依頼論文
- 2001年「日本語を媒介語とする国際学生交流—日本語教員養成論の立場から—」『日本語教

- 育研究』信州大学人文学部冲研究室 pp.36-45
- 2001年「リソースとしての日本語教育実習」『日本語教育方法研究会会誌』pp.4-5（共著：合津美穂・冲裕子）
- 2001年「日本語教育学と方言学—学の樹立改変と談話研究への広がり—」『国文学 解釈と教材の研究』第46巻第12号 学燈社 pp.96-107, 依頼論文
- 2001年「中近畿アспектについて」工藤真由美編『方言のアспект・テンス・ムード体系変化の総合的研究』科研費報告書 pp.61-76
- 2002年「日本語教員とは何か—戦後の日本語教員養成政策の観点から—」『信大日本語教育研究』第2号 pp.166-180
- 2002年「信州の日本語教員養成」『内陸文化研究』第2号 信州大学人文学部 pp.27-36
- 2002年「談話の方言学」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会 pp.235-246 依頼論文
- 2002年「長野県方言における気づかれにくい方言の生成過程」『松高科学研究助成記念誌 研究成果報告書』pp.99-100
- 2003年「日本語教育学と日本語教育—学の対象を整理する—」『信大日本語教育研究』第3号 pp.59-70
- 2003年「特集伝聞 方言の「聞き伝え」表現」『月刊言語』第32巻第7号 大修館書店 pp.55, 依頼論文
- 2004年「比喩の形式と意味—日本語教育のための基礎的研究—」『信大日本語教育研究』第4号 pp.2-15
- 2004年「同時結節のしくみと東京方言談話」『日本語文法』第4巻第1号 日本語文法学会 pp.93-110
- 2007年「談話論からみた方言と日本語教育」『日本語教育』第134号 日本語教育学会 pp.28-37
- 2007年「各地方言から見る『方言文法全国地図』中部（長野・山梨）方言」『日本語学臨時増刊号 方言文法全国地図をめぐる』第26巻第11号 明治書院 pp.180-181, 依頼論文
- 2008年「談話論からみた「文」と「発話」」串田秀也・定延利之・伝康晴編『シリーズ文と発話2 単位としての文と発話』ひつじ書房 pp.45-69
- 2008年「気づかれにくい方言「それで」」『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』pp.304-322
- 2009年「日本語教員養成課程の目的と現状および課題」『大養協論集』2008 大学日本語教員養成課程研究協議会 pp.10-14
- 2009年「発想と表現の地域差」『月刊言語』第38巻第4号 大修館書店 pp.16-23, 依頼論文
- 2010年「日韓中の外言談話にみる発想と表現—日本語と日本語教育のための基礎的研究—」『人文科学論集＜文化コミュニケーション編＞』第44号 信州大学人文学部紀要 pp.1-25（国際共著：冲裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二）
- 2010年「日本語依頼談話の結節法」『日本語学研究』28輯 韓国日本語学会会誌：ソウル pp.119-136

- 2010年「発想と表現からみる日本語依頼談話のしくみと指導」劉曉芳主編『日本語教育与日本語学研究』第5号 華東理工大学出版：上海 pp.182-186（国際共著：沖裕子・趙華敏）
- 2010年「方言談話の対象と方法」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見—知られざる地域差を知る—』ひつじ書房 pp.161-182
- 2011年「日本語談話の発想と表現」『社会言語科学』第13巻第2号 社会言語学会会誌 pp.138-143（国際共著：沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二）
- 2011年「日本語談話種の分類方法」修剛・李運博主編『異文化コミュニケーションのための日本語教育』pp.553-554
- 2013年「終助詞を用いた推量表現—談話論による松本方言の分析—」『人文科学論集＜文化コミュニケーション編＞』第47号 信州大学人文学部紀要 pp.1-14
- 2013年「談話論からみた句末音調の抽出」『国立国語研究所論集』第5号 pp.77-94
- 2013年「書評論文」「書評 井上史雄著『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』」『日本語の研究』第9巻第3号 日本語学会会誌 pp.90-95, 依頼論文
- 2013年「談話種変換からみた日本語談話の特徴—わきまえ・察し・見立て・仕立て—」『明海日本語 第18号増刊号 井上史雄先生古希祝いオンライン論文集』明海大学日本語学研究室 pp.223-237
<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/hjapanese/meikainihongo/18ex/default.htm/>
- 2013年「大規模方言談話資料にみる受話法の地域差」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書』国立国語研究所 pp.38-58
- 2014年「方言にみる頼みかたの表現と発想」小林隆編『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』ひつじ書房 pp.125-142
- 2014年「談話論からみた命令表現」『日本語学』第33巻第4号 明治書院 pp.14-22, 依頼論文
- 2015年「松本方言終助詞の文法体系：談話研究の基礎」『信州大学人文科学論集』第2号 pp.233-350
- 2016年「基調講演：異文化交流と日本語教育：中日依頼談話の違い」陳百海・趙華敏主編『跨文化国際与日語教育研究（異文化交流と日本語教育研究）』黒龍江人民出版社：春日ン pp.3-20 [招待講演内容の記録]
- 2017年「談話論からみた松本方言の判断終助詞と通知終助詞」日本方言研究会編『方言の研究』第3号 ひつじ書房 pp.217-238
- 2018年「日本語の談話構築態度—日韓相互の情緒的違和感を説明するモデルの検討—」『日本語学研究』第55輯 韓国日本語学会会誌：ソウル pp.141-158（国際共著：沖裕子・姜錫祐）
- 2018年「依頼談話の発想と表現—異文化接触問題の解決をめざした日韓中対照談話論—」『社会言語科学』第21巻第1号 社会言語学会会誌 pp.80-95（国際共著：沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二）
- 2018年「長野県方言敬語の発想と表現—敬意終助詞が担う親しきと敬い—」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房 pp.251-270

- 2019年「日韓中対照からみた日本語の談話構築態度—発想と表現の差を説明するモデルの検討—」『日本研究』第50輯 韓國中央大學校日本研究所：ソウル pp.65-88
DOI 10.20404/jscau.2019.02.50.00（国際共著：沖裕子・姜錫祐・趙華敏）
- 2019年「対照談話論からみた日韓の省略」『信州大学人文科学論集』第7号 pp.83-96
- 2019年「国際調査からみる日韓大学生の依頼談話意識」『日本語學研究』第62輯 韓國日本語學會誌：ソウル pp.65-88（国際共著：沖裕子・姜錫祐）
- 2020年「談話論からみた長野県北信方言の絶対敬語」『學海』第6号 上田女子短期大学, pp.21-39, 依頼論文

学会活動

- 1999年 日本語教育学会学会誌査読協力者
[名称変更後は日本語教育学会審査・運営委員]（至現在）
- 2000年 社会言語科学会学会誌編集委員（2006年迄）
- 2000年 日本語文法学会編集委員（2004年迄）
- 2001年 国語学会大会企画運営委員（2004年迄）[2004年から名称変更日本語学会へ]
2003年秋季大会（於信州大学）開催
- 2001年 日本音声学会会計監査（2004年迄）
- 2002年 日本方言研究会世話人（2008年迄）
- 2003年 社会言語科学会理事（2009年迄）
- 2003年 日本語学会評議員（2期2015年迄）
- 2006年 社会言語科学会大会委員（2007年迄）
- 2007年 社会言語科学会広報委員長（2009年迄）
- 2007年 韓國日本語學會編集委員（2011年迄）
- 2008年 日本語学会編纂『日本語学大辞典』第1期編集委員（2012年迄）
- 2011年 社会言語科学会発表賞選考委員（2013年迄）
- 2013年 社会言語科学会第32回大会（於信州大学）実行委員長（2013年迄）
- 2013年 韓國日本語學會海外一般理事（4期2021年迄）
- 2015年 社会言語科学会発表賞選考委員（2017年迄）
- 2015年 長野・言語文化研究会代表（至現在）
- 2018年 日本語教育学会 学会活動貢献賞受章 [査読活動に対して]

社会活動

- 2001年 松本深志高等学校 学校評議員（2002年迄）
- 2001年 松本市図書館協議会委員（2001年迄）
- 2001年 松本市教育委員（2005年迄）
- 2008年 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員 [第1段審査委員]（2009年迄）
- 2012年 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、
同 国際事業委員会書面審査員（2014年迄、2015年～2017年迄）
- 2015年 財団法人八十二文化財団理事（2019年迄）

2016年 国立国語研究所外部評価委員（2020年迄）

外部資金（代表者受入のみ記載）

2000～2001年度 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：12610429

2005年度 日本学術振興会科学研究費補助金成果公開促進費学術図書 課題番号：175115

2007年度～2010年度 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：19520389

2011年度 日本学生支援機構帰国外国人留学生研究指導事業助成

2012～2014年度 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：24520498

2015～2018年度 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：15K02561

2018年度～ 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：18K00609

【謝辞】 本内容は、上記 JSPS 基盤研究(C)助成による成果物の一部である。

（2020年4月30日受理，5月20日掲載承認）